

高齢者のスポーツに関する社会心理学的研究(4) : 都市と農村におけるゲートボール実施者の比較

金崎, 良三
Institute of Health Science Kyushu University

徳永, 幹雄
Institute of Health Science Kyushu University

多々納, 秀雄
Institute of Health Science Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/492>

出版情報 : 健康科学. 10, pp.33-48, 1988-02-20. 九州大学健康科学センター
バージョン :
権利関係 :

高齢者のスポーツに関する社会心理学的研究(4)

— 都市と農村におけるゲートボール実施者の比較 —

金 崎 良 三 徳 永 幹 雄 多々納 秀 雄

A Social Psychological Study on Sport among Senior Citizens(4) : Comparison
of Gateball Players between Urban and Rural Areas

Ryozo KANEZAKI, Mikio TOKUNAGA and Hideo TATANO

Abstract

The present study was carried out from social psychological viewpoint to clarify the differences of gateball players between urban and rural areas concerning their personal attribute, situation of life, sport activity, consciousness of sport, gateball activity and consciousness of gateball. The investigation was conducted to 448 male and 273 female senior citizens over 50 years of age including gateball players and non-gateball ones by questionnaire method at Fukuoka City as urban area and Yatsushiro City as rural one in Summer, 1983.

The results were summerized as follows:

1. Both male and female, the regional differences were recognized concerning such items as educational career, years of residence, relation between living accommodation and working place in the prime of life, occupation, consciousness of leisure in the prime of life, resource of the present life, relation to the neighbors and activities of taste. However, there was no significant difference about consciousness of life.
2. Both male and female, there are more gateball players who play sport except gateball in urban area than in rural area. However, the regional difference was not admitted about sport experience in the past and consciousness of sport.
3. Concerning gateball activity, the regional differences were recognized on several items. As for male, these items were time of playing gateball, years of gateball experience, place for playing gateball, qualification of umpire, view to tournament, level of tournament and view to gateball organization. On the other hand, as for female, these were time of playing gateball, years of gateball experience, place for playing gateball, qualification of umpire, view to tournament and view to gateball rules.
4. The problems on playing gateball were not so serious in both urban and rural areas.
5. Concerning consciousness of gateball, both male and female, there were no regional differences about behavioral intension, normative belief toward family members and friends, belief toward the effect of playing gateball and attitude toward gateball.
6. Both male and female, players in urban area have a good evaluation toward the effect of gateball relatively, however, players in rural area have some troubles related to playing gateball.

(Journal of Health Science, Kyushu University, 10: 33 - 48, 1988)

緒 言

わが国は、高齢化社会に向かって着実に進みつつある。社会全体を見渡すと、人口の高齢化に伴って就労問題、年金制度、医療保険、住宅、福祉、余暇など広い範囲にわたって取り組むべき課題は多い。とりわけ、高齢者にとっていかに健康で楽しく生きるかということは、極めて重要な課題になってこよう。近年、高齢者のスポーツに対する関心は高まってきており、それは単に健康の維持・増進のためだけでなく「生きがい」としても見直され始めた。

今日ゲートボールは、高齢者の中で最も親しまれている集団スポーツである。従来ゲートボールに関しては、その身体的、心理的、社会的効用性が報告されてきた。^{1),2),3)} しかし一方では、このスポーツに熱中し過ぎたり競技会での勝敗を重視するあまり、さまざまな問題も生じているという指摘もある。^{4),5)} 高齢者スポーツとしてのそのあり方について検討していくことは、今後とも必要であろう。

ところで、ゲートボールの実施状況や実施者の意識、ゲートボールのあり方も地域の特性あるいは実情によって異なるものと考えられる。ある地域の産業構造や地理的、文化的、社会的環境は、その地域に居住する人びとのスポーツ活動にも影響を及ぼすと思われるからである。そこで本研究では、都市と農村という2つの地域を調査対象とし、ゲートボール実施者の特性、生活状況、スポーツ活動と意識、ゲートボールの実施状況、ゲートボールに対する態度、信念、行動意向、規範信念及びゲートボール実施後の変化についての評価などに関してどのような地域差がみられるのかを明らかにするとともに、それぞれの地域における高齢者スポーツとしてのゲートボールの課題を検討することにした。

方 法

1. 調査の概要

(1) 調査対象

都市部としては福岡市、農村部としては熊本県八代市を対象地域として選定した。福岡市の中心部を占める中央区と城南区及び八代市の農村地域に居住する50歳以上のゲートボール実施者而非実施者を対象に調査を実施した。対象者数は、表1に示すとおりである。ここで、対象者の年齢構成に触れておこう。男子は、都市部が「70～74歳」38.0%、「65～69歳」31.8%、「75～79歳」24.8%の順に多く、ほとんどの

表1 調査対象者数

(人)

区分		地域	
		都市部(福岡市)	農村部(八代市)
男	実施者	140	185
	非実施者	60	63
女	実施者	99	103
	非実施者	33	38

者がこれらの年齢層に含まれるのに対し、農村部は「65～69歳」23.1%、「60～64歳」21.4%、「70～74歳」18.7%、「55～59歳」14.8%と年齢幅が広く、50歳代や60歳代前半の者が多い。女子は、都市部が「65～69歳」39.8%、「70～74歳」24.7%、「60～64歳」17.2%、「75～79歳」15.1%の順であり、農村部は「60～64歳」21.6%、「70～74歳」19.6%、「65～69歳」18.6%、「55～59歳」17.5%となっている。女子も、農村部の方が年齢の若い者が多く年齢幅も広い。特に都市部においては、50歳代後半の女子が2人だけであった。これは、50歳代の実施者がもともと少ないためである。

(2) 調査方法

各地域のゲートボール協会役員、地区世話人、クラブ代表者などを通して調査票の配布と回収を行った。なお、調査票の全体の回収率は、ゲートボール実施者90.6%、非実施者55.7%であった。

(3) 調査時期

昭和58年7月～8月。

2. データの分析

都市部と農村部の特徴を比較するため、性別にカイ自乗検定を行い、さらにクラマー係数を算出した。また、それぞれの地域のゲートボール実施者の特徴をより明らかにするために非実施者との比較を適宜行った。

結果と考察

1. ゲートボール実施者の特性と生活状況

表2は、ゲートボール実施者の基本的特性と生活意識を含めた生活状況の地域差をみたものである。合計20項目中、男子は10項目、女子は11項目に関して1～5%水準の有意差がみられた。クラマー係数では、男子の「長く従事した職業」、「居住年数」、「最終学

表2 ゲートボール実施者の特性と生活状況の地域差

項目		性別		女子	
		検定・係数	男子	検定	女子
		χ^2 検定	クラマー係数	χ^2 検定	クラマー係数
基本的特性	1 最終学歴	**	•436	**	•426
	2 居住年数	**	•499	**	•377
	3 働き盛りの居住地と職場	**	•400	**	•351
	4 長く従事した職業	**	•517	**	•476
	5 働き盛りの頃の余暇観	**	•219	**	•322
	6 現在の生活方法	**	•408	**	•409
	7 健康状態	—	•119	—	•120
	8 体力状態	—	•139	—	•081
生活行動	9 地域行事・活動への参加	—	•087	—	•126
	10 毎日の生活の楽しさ	—	•076	—	•126
	11 近所づきあい	**	•325	**	•318
趣味活動	12 囲碁・将棋など	**	•356	**	•670
	13 盆栽・庭いじり	*	•253	**	•396
	14 音楽・民謡など	—	•168	**	•624
	15 書・華・茶道, 絵画	*	•355	**	•587
生活意識	16 他人はあてにならない	—	•027	—	•047
	17 リーダーより従う方が楽	—	•011	—	•017
	18 協力すれば相当なことができる	—	•103	—	•045
	19 友人関係で束縛されたくない	—	•056	—	•129
	20 人助けはよいが犠牲はいや	—	•050	—	•030

**P<.01, *P<.05

歴], 「現在の生活方法」, 「働き盛りの頃の居住地と職場」, 女子の趣味活動の「囲碁・将棋など」, 「音楽・民謡など」, 「書・華・茶道, 絵画」, 「長く従事した職業」, 「最終学歴」, 「現在の生活方法」などの項目が高い値を示しており, 都市部と農村部では顕著な違いがあることを示唆している。概して, 男女とも基本的特性と趣味活動において地域差が目立っている。以下, 有意差のみられた項目の内容についてみていくことにする。

(1) 基本的特性

1) 最終学歴

男子の場合, 「小学校」は都市部 5.4%, 農村部 16.8%, 「旧制高小・新制中学」は都市部 34.9%, 農村部 65.4%, 「旧制中学・新制高校」は都市部 43.4%, 農村部 13.5%, 「旧制専門学校, 短大・大学以上」は都市部 16.3%, 農村部 4.3% であった。つまり, 最終学歴は都市部の方が高いといえる (P<.01)。一方女子についてみると, 「小学校」都市部 10.6%, 農村部 45.9%, 「旧制高小・新制中学」都市部 39.4%, 農村部 34.7%,

「旧制中学・女学校, 新制高校」都市部 45.7%, 農村部 16.3%, 「旧制専門学校, 短大・大学以上」都市部 4.3%, 農村部 3.1% となっている。女子の場合も, 男子と同じく都市部の方が学歴は高いといつてよい (P<.01)。男女とも, 最終学歴に関しては顕著な地域差がみられた。

2) 居住年数

現在の場所にいつ頃から住んでいるかについてみると (図1), 男子は「生まれてからずっと」という者が都市部では僅か 5.4% しかいないが, 農村部では約半数に近い。女子も, この点は都市部の 4.3% に対し農村部は 30.1% であった。都市部の場合も「20年以上前から」が男女とも最も多く居住歴はかなり長い方であるが, 農村部に比べていわゆる土着型の者は少ない。居住年数の長い者は, 男女とも農村部に多いといつてよい (男子 P<.01, 女子 P<.01)。

3) 働き盛りの頃の居住地と職場

40~50歳代の働き盛りの頃住んでいた町内・校区と働いていた場所との関係を調べたところ, 男子では

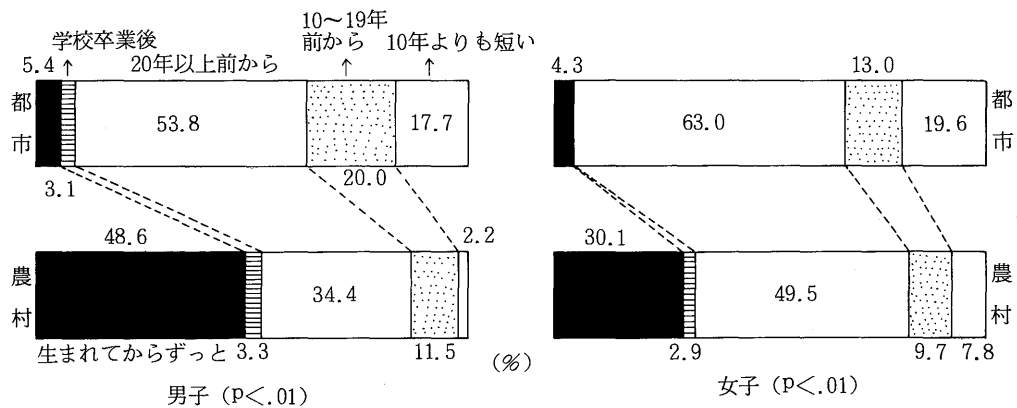


図1 居住年数

「まったく同じ」という者が都市部 37.0%，農村部 69.4%，「少し離れていた」は都市部 29.1%，農村部 25.0%，「かなり離れていた」は都市部 33.9%，農村部 5.6%であった。明らかに、農村部では居住地と職場が同じであった者が多い (P<.01)。女子の場合は、「まったく同じ」都市部 39.5%，農村部 73.5%，「少し離れていた」都市部 36.8%，農村部 19.4%，「かなり離れていた」都市部 23.7%，農村部 7.1%であった。女子も男子と同様の傾向であり、居住地と職場が一致していた者が農村部に多い (P<.01)。この点は、先にみた居住年数の結果とも関連するものと思われる。農村部では、その場所で生れて育ち、同じ場所で働いてきた者が多いということである。

4) 長く従事した職業

若い頃から現在までの間で最も長く従事した職業は、図2に示すとおりである。産業構造の関連からみて、農村部で男女とも「農林漁業」が最も多いことは当然といえよう。都市部に多いのは、男子では「事務職」、「商業・自営業」、「専門職」、女子では「その他」と「商業・自営業」となっている。「その他」には、専業主婦が多く含まれていると考えられる。いずれにせよ、長く従事した職業に関しては両地域間で顕著な違いがみられた (男子 P<.01, 女子 P<.01)。

5) 働き盛りの頃の余暇観

働き盛りの頃の仕事と余暇 (趣味、スポーツ、娯楽など) についての考え方を調査した。回答カテゴリーは、「余暇中心型」(仕事よりも余暇の中に生きがい

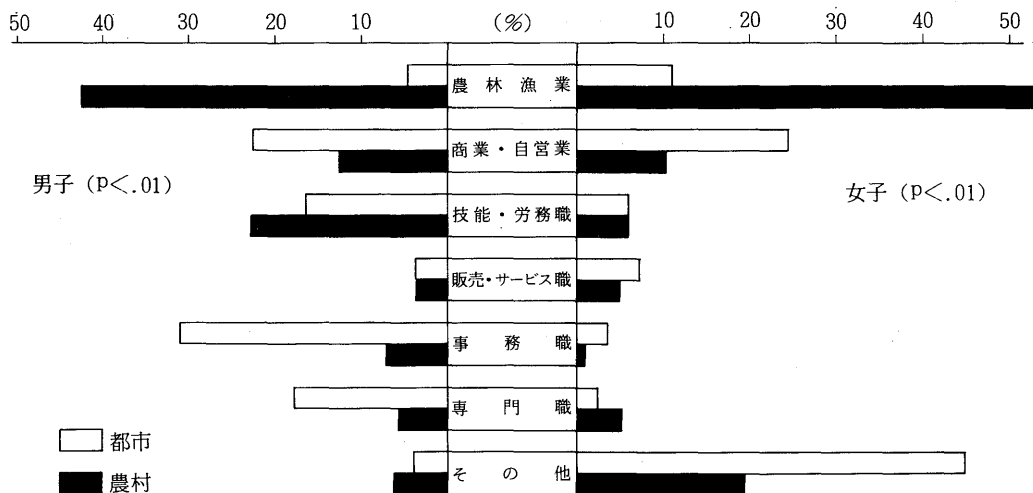


図2 長く従事した職業

求めていた)、「余暇重視型」(仕事はさっさとかたづけ
てできるだけ余暇を楽しんだ)、「仕事と余暇型」(仕事
にも余暇にも同じくらい力を入れていた)、「仕事重視
型」(余暇も時には楽しんだが仕事に力を入れてい
た)、「仕事中心型」(仕事に生きがいを求め全力を傾け
た)というものであった。まず男子についてみると、
都市部で「仕事重視型」43.0%、「仕事中心型」32.0%、
「仕事と余暇型」17.2%の順となっており、「余暇重視
型」や「余暇中心型」は極めて少ない。農村部では「仕
事重視型」45.1%、「仕事中心型」20.9%、「余暇重視
型」16.5%の順であった。両地域とも仕事の方をより重
視した者が多いわけであるが、余暇を重視した者とな
ると数は少ないが都市部より農村部に多くみられる ($P < .01$)。女子の場合は、都市部で「仕事重視型」
46.4%、「仕事と余暇型」21.4%、「仕事中心型」19.0%、
農村部で「仕事中心型」31.3%、「余暇重視型」29.3%、
「仕事重視型」23.2%であった。女子の「仕事重視型」
は都市部に、「仕事中心型」は農村部にそれぞれ多いと
いう結果になっている。しかしながら、この2つのタ
イプを合計して考察すると都市部には余暇より仕事を
重視した者が多く、余暇を重視した者は農村部に多い
といえよう ($P < .01$)。

6) 現在の生活方法

この点に関しては、地域差が著しい(男子 $P < .01$,
女子 $P < .01$)。すなわち、男子は都市部で74.6%が
「定職はないが恩給や退職金、不動産などで生活して
いる」と答えているのに対し、農村部ではこの点
36.9%にとどまっている。反面、「定職がありそれで生
活している」という者が農村部では最高の38.6%を占
めているが、この点都市部では7.9%どまりである。
また、「定職がなく家族に生活をみてもらっている」と
いう者は、都市部(8.7%)より農村部(16.5%)に多
い。女子の場合は、「定職はないが恩給や退職金、不動
産などで生活している」という者が、都市部では
60.0%を占めたが農村部では28.3%と都市部の半数
以下であった。農村部では、「家族に生活をみてもらっ
ている」という者が29.3%と最も多く、また都市部で
は皆無であった「定職がありそれで生活している」と
いう者が19.2%いる。つまり、都市部では男女とも仕
事を離れて生活する者が大部分であるのに対し、農村
部では現在も定職に就いている者も多く、生活方法は
多様である。この結果は、農村部の実施者の中には50
歳代の者が2割強含まれていることと関係があると考え
られる。

(2) 生活行動

生活行動に関する3項目の中では、「近所づきあい」
についてのみ男女とも1%水準の有意差がみられた。
その内容をみると、男子は都市部で「挨拶をする程度」
38.3%、「立話をする程度」24.2%、「用事を頼んだり物
を貸し借りするほど親密である」22.7%、農村部は「用
事を頼んだり物を貸し借りするほど親密である」
51.6%、「挨拶をする程度」16.5%、「立話をする程度」
15.9%の順となっている。これからわかるように、農
村部の方が近所づきあいの程度ははるかに深い。次に
女子の場合をみると、都市部では「挨拶をする程度」
32.3%、「立話をする程度」26.9%、「一緒に買物や会合
に出かけたりする」21.5%、農村部では「用事を頼んだり
物を貸し借りするほど親密である」41.0%、「一緒に
買物や会合に出かけたりする」28.0%、「挨拶をする程
度」15.0%の順であった。女子の場合も、農村部の方
が近所づきあいは親密といってよい。

(3) 趣味活動

1) 囲碁・将棋

まず男子は、都市部では「週3回以上」実施する者
が最も多く27.3%、次いで「月1回くらい」23.6%、
「ほとんどしない」23.6%の順であり、農村部では「ほ
とんどしない」54.5%、「週3回以上」23.6%、「週1～
2回」10.9%と続いている。つまり、囲碁・将棋は都
市部に実施する者が多いといえる ($P < .01$)。女子は、
この点についてのサンプル数が都市部 $N = 6$ 、農村部
 $N = 25$ と少なくそのためクラーメー係数も高い値を示
したものと思われるが、やはり農村部より都市部に実
施者が多い結果となっている ($P < .01$)。

2) 盆栽・庭いじり

盆栽や庭いじりを「週1回以上」実施している者は、
男子の都市部で70.4%、農村部で58.4%、女子の都市
部で72.4%、農村部で56.6%であった。男女ともほぼ
同じ傾向であり、都市部の方に実施している者が多い
(男子 $P < .05$, 女子 $P < .01$)。

3) 音楽・民謡

男子の間には、この点についての地域差はみられな
かった。女子の間では、都市部に「週3回以上」実施
している者が28.1%、「週1～2回」は37.5%ほどみ
られたが、この点農村部ではそれぞれ4.2%と6.3%
と極少であった。すなわち、音楽や民謡をたしなむ者
は都市部に多い ($P < .01$)。

4) 書道・華道・茶道、絵画

男子でこれらの活動を「週1回以上」実施するとい
う者は、都市部で22.8%、農村部で11.9%、「ほとんど

しない」という者は都市部 48.6% に対し農村部は 76.2% を占めている。実施程度は多様であるが、都市部の方にこれらの活動を行う者が多い ($P < .05$)。女子は、「週 1 回以上」は都市部で 52.7%，農村部では 10.3%，逆に「ほとんどしない」は都市部 15.8%，農村部 72.4% であった。女子の場合は男子より地域差が顕著であり、都市部においてよく実施されている ($P < .01$)。

以上、ゲートボール実施者の特性と生活状況に関して都市と農村の違いがいくつかの点で明らかになった。すなわち男子の場合、都市部のゲートボール実施者は農村部の実施者に比較して、①最終学歴は高い、②居住年数は短い者が多い、③働き盛りの頃の居住地と職場が同じであった者が少ない、④長く従事した職業は事務職や商業・自営業、専門職が多い、⑤働き盛りの頃の仕事と余暇についての考え方は仕事を重視した者が多い、⑥定職はないが恩給や退職金、不動産などで生活する者が多い、⑦近所づきあいはそれほど親密ではない、⑧囲碁・将棋、盆栽・庭いじり、書道・華道・茶道、絵画などの趣味活動を行っている者が多い、ということである。農村部の実施者の場合は、上記④の職業が農林漁業と技能・労務職が多いということと⑥の生活方法が多様であること以外はすべて逆の傾向である。女子の場合、都市部の実施者は農村部の実施者に比べて上記①最終学歴、②居住年数、③働き盛りの頃の居住地と職場、⑤仕事と余暇についての考え方、⑥生活方法、⑦近所づきあいに関しては男子と同じ傾向であり、異なるのは④の長く従事した職業が「その他」と「商業・自営業」が多いことと⑧の趣味活動がすべての活動について実施している者が多いということである。また、女子の農村部の実施者について

いえば④の職業が「農林漁業」が多いこと及び⑥の生活方法が多様であるという点以外は、すべて都市部の実施者の逆の傾向であるといえる。ゲートボール実施者のこのような傾向は、都市と農村という地域特性による教育の機会、土地との結びつき、生活の仕方、産業構造、職業選択の機会、趣味・娯楽の機会、地域の人間関係の違いを反映するものと考えてよからう。

一方、表 2 にみられるように基本的特性に関する項目のうち「健康状態」と「体力状態」、生活行動の「地域行事・活動への参加」（老人会・祭り・公民館活動・奉仕活動などへの参加程度）と「毎日の生活の楽しさ」、及び 5 項目の意見から成る生活意識については、男女とも有意な地域差は認められなかった。これらの点は、都市部の実施者も農村部の実施者も同様な傾向をしているということである。ちなみに、これらの点を非実施者との比較でみると、両地域の実施者は健康状態はよく体力もあると評価しており、地域行事への参加程度も高く、毎日の生活の楽しさもよく味わっている。なお、生活意識に関しては非実施者との間にも有意差はみられなかった。

2. スポーツ活動と意識

表 3 は、スポーツ活動と意識についての地域差を性別にみたものである。男子は、「ゲートボール以外のスポーツの実施程度」とスポーツ意識の「生活でのスポーツの必要性」に 5% 水準の有意差がみられた。女子は、「ゲートボール以外のスポーツの実施程度」のみに 1% 水準の有意差が認められた。

(1) ゲートボール以外のスポーツの実施程度

ゲートボールを除いた他のスポーツ（散歩・軽運動・体操・ダンス等も含む）を、どの程度実施してい

表 3 スポーツ活動と意識についての地域差

項目	性別 検定・係数	男 子		女 子	
		χ^2 検定	クラマー係数	χ^2 検定	クラマー係数
		活 動	1. ゲートボール以外のスポーツの実施程度	*	.185
	2. 過去のスポーツ経験	—	.092	—	.163
意 識	3. スポーツの好き嫌い	—	.081	—	.160
	4. 生活でのスポーツの必要性	*	.168	—	.153
	5. スポーツでの重要な態度	—	.104	—	.151

** $P < .01$, * $P < .05$

表4 ゲートボール以外のスポーツの実施程度 (%)

		N	ほとんどしていない	年に数回	月1~2回	週1~2日	週3日以上
男子	都市	128	35.2	7.0	10.0	15.6	31.3
	農村	177	40.1	15.8	12.4	8.5	23.2
女子	都市	89	49.4	4.5	3.4	23.6	19.1
	農村	94	56.4	10.6	12.8	10.6	9.6

男子P<.05, 女子P<.01

るかについてみたのが表4である。男女とも、既にゲートボールを実施しているためと思われるが、「ほとんどしていない」という者が最も多い。しかし、「週1日以上」実施となると男子は都市部で46.9%、農村部で31.7%、女子は都市部で42.7%、農村部で20.2%となっており、都市部ではかなりの割合を占めている。ともあれ、ゲートボール以外のスポーツについては、男女とも都市部の方が農村部より実施程度は高いといつてよい。

(2) 過去のスポーツ経験

表5は、若い頃のスポーツ経験について調べたものである。スポーツを「積極的にやった」と「かなりやった方」を合計してみると、男女ともに都市部の方にスポーツ経験のある者が多いが、両地域間に有意な差はみられなかった。かつて徳永・金崎⁹⁾は、ゲートボール実施者は過去においてスポーツ経験の少ない者が多いと報告したが、今回の調査ではスポーツ経験者もかなりゲートボールを始めていることがうかがえる。特に、この傾向は男子に強い。

表5 過去のスポーツ経験 (%)

		N	積極的にやった	かなりやった方	ほとんどしたくない
男子	都市	128	36.7	45.3	18.0
	農村	181	28.7	48.1	23.2
女子	都市	89	18.0	40.4	41.6
	農村	97	18.6	25.8	55.7

男子None, 女子None

(3) スポーツ意識

まず、スポーツの好き嫌いについてみると、男女とも「子供の頃も今も好き」という者が多数を占め、そ

こに地域差はみられなかった。この点を非実施者と比較すると、地域別、性別を問わず実施者の方が多くを占めている。現在、スポーツが嫌いという者はほとんどいないが、「子供の頃は嫌いだったが今は好き」という者が都市部男子13.1%、同女子19.6%、農村部男子17.7%、同女子33.3%みられたのは、スポーツに対する態度の好意的変容の事例として注目される。なお、ゲートボール実施者について徳永・金崎⁹⁾も、これと同様の報告をしている。

次に、スポーツの必要性についてみてみよう。人びとの生活において、スポーツは「あった方がよい」とする者が両地域とも圧倒的に多く、「まったく必要ない」と「なくてもよい」とする者はほとんどいない。女子に地域差はみられなかったが、男子には5%水準の有意差があり、スポーツは「不可決なものである」とする者が都市部に多い。

最後に、スポーツ場面における態度として「全力を尽くす」、「勝利をめざす」、「正々堂々とする」、「活動を楽しむ」といったことのいずれを重視するかについてみてみよう。男子では、「全力を尽くす」が都市部36.9%、農村部35.3%で最も多い。女子は、「活動を楽しむ」が都市部51.1%、農村部46.0%と他を大きく引き離して第1位であった。そこには男女間の違いが存在するようであるが、地域差はみられなかった。

以上みてきたように、スポーツ意識に関しては両地域にこれといった違いはみられず、したがってゲートボールの場合は都市と農村の特性が実施者のスポーツ意識に反映するとはいい難い。

3. ゲートボール活動と実施上の問題

表6は、ゲートボールの活動に関する17項目と実施上の問題に関する6項目について地域差をみたものである。以下、その内容をみていこう。

表6 ゲートボール活動と実施上の問題についての地域差

項目	性別 検定・係数	男 子		女 子	
		χ^2 検定	クラマー係数	χ^2 検定	クラマー係数
ゲートボール活動について	1 実施程度	△	.143	△	.183
	2 1日の実施時間	*	.216	**	.295
	3 開始したきっかけ	—	.144	△△	.224
	4 経験年数	**	.508	**	.641
	5 実施場所	**	.704	**	.695
	6 クラブ所属	—	.068	—	.094
	7 大会出場経験	—	.014	—	.069
	8 出場した大会の規模	**	.353	△△	.225
	9 選手としての出場程度	△△	.127	—	.089
	10 監督の経験	—	.062	—	.107
	11 審判員資格の有無	*	.113	**	.288
	12 ルールの違いによる困惑	—	.033	—	.040
	13 ルールの全国統一	△	.138	*	.210
	14 団体・組織のあり方	*	.159	—	.139
	15 大会のあり方	**	.195	**	.347
	16 継続要因	—	.122	—	.190
	17 所属クラブのタイプ	△△	.157	—	.128
実施上の問題	18 練習に対する不平・不満	—	.060	—	.098
	19 審判に対する不平・不満	—	.051	—	.034
	20 リーダーに対する不平・不満	—	.023	△△	.141
	21 練習中に対人関係でいやな思い	—	.123	—	.011
	22 選手選考でいやな思い	—	.071	—	.054
	23 今までにやめたい気持ち	△△	.149	*	.220

** $P < .01$, * $P < .05$, △△ $P < .10$, △ $P < .20$

表7 最近3ヶ月のゲートボールの実施程度

(%)

		N	まったく していない	月1日以下	月2～3日	週1～2日	週3～4日	週5日以上
男 子	都市	131	—	0.8	2.3	6.1	22.9	67.9
	農村	185	—	0.5	7.6	7.0	28.1	56.8
女 子	都市	95	—	1.1	3.2	6.3	21.1	68.4
	農村	103	—	—	8.7	7.8	29.1	54.4

男子 $P < .20$, 女子 $P < .20$

(1) ゲートボールの実施程度

最近3ヶ月間のゲートボールの実施程度は、表7に示すとおりである。男女とも、有意差はみられなかった。都市部は6割以上、農村部は5割以上の者が、「週5日以上」実施している。「週3日以上」で合計すると、大部分の者がこの中に含まれる。総理府の体力・

スポーツに関する世論調査⁹⁾(昭和57年)によってスポーツの実施程度をみると、「週3日以上」22%、「週1～2日」22%、「月に1～3日」30%となっている。都市部、農村部ともにゲートボールの実施程度は、極めて高いといってよい。それは、実施者の多くが仕事から離れ、比較的自由時間に恵まれた層であるため

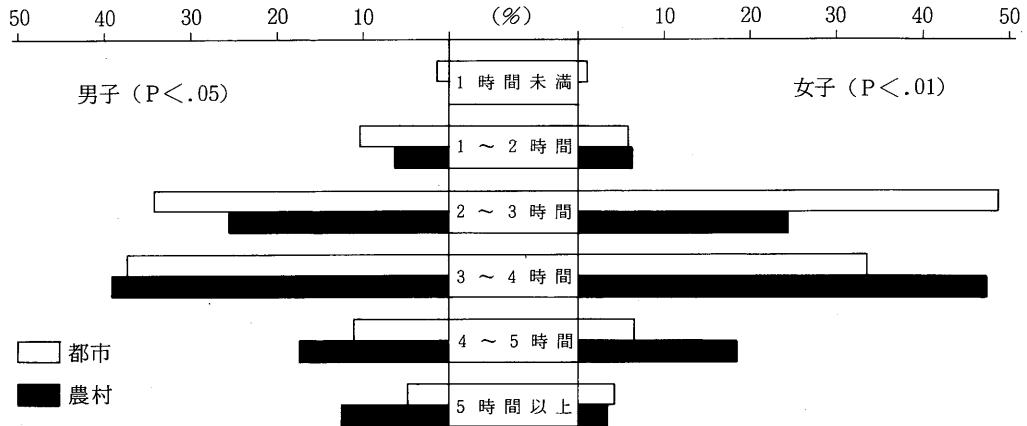


図3 ゲートボールの1日平均の実施時間

あろう。

(2) 1日平均の実施時間

ゲートボールの1日平均の実施時間は、男子は3時間未満の者は都市部に多いが、3時間以上になると農村部の方に占める割合が大きい(図3)。女子は、都市部で最も多いのが「2~3時間未満」(48.9%)であるが、農村部では「3~4時間未満」が47.4%を占めて第1位である。男女とも、農村部の方が1日平均の実施時間は長い傾向にある(男子P < .05, 女子P < .01)。

(3) 経験年数

図4は、ゲートボールの経験年数を示す。まず男子をみると、都市部は「3~4年」が最も多く大部分が6年以内の経験者である。これに対して農村部は、経

験年数の長い者や短い者など多様であるが、7年以上の経験者が半数近くを占めており、都市部より長い者が多い(P < .01)。女子は、4年以内という者が都市部で72.2%と大部分を占めるが、農村部では16.8%に過ぎない。女子の場合は、男子よりさらに顕著な違いをみせており、農村部の方が経験年数は長い者が多い(P < .01)。この結果は、農村部の調査地点である八代市では比較的早い時期にゲートボールが普及していたためと考えられる。

(4) 実施場所

ゲートボールの実施場所については、表8から明らかのように両地域間には大きな違いがある(男子P < .01, 女子P < .01)。すなわち、男女とも都市部では主として公園で実施しているのに対し、農村部ではこれ

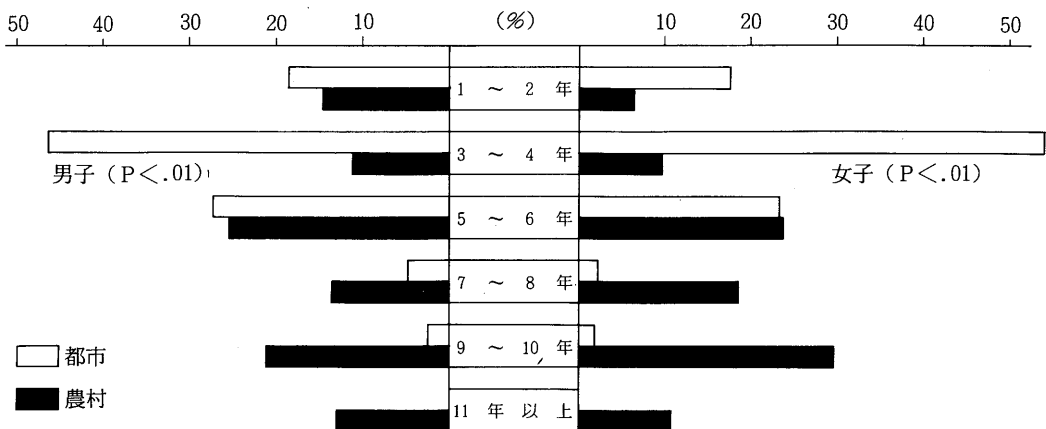


図4 ゲートボールの経験年数

表8 ゲートボールの実施場所 (%)

		N	公園	寺・神社の境内	公民館の庭	休耕田	あき地	その他
男子	都市	125	84.0	3.2	1.6	—	7.2	4.0
	農村	181	14.4	5.0	3.3	12.2	24.9	40.3
女子	都市	91	78.0	6.0	—	—	9.9	5.5
	農村	100	11.0	12.0	5.0	10.0	27.0	35.0

男子 $p < .01$, 女子 $p < .01$

が僅か10%台を占めるにしか過ぎない。農村部では、「その他」と「あき地」が多い。これは、都市と農村の地理的・自然的環境の違いが、ゲートボールの実施場所の差として現われているものといえよう。ゲートボールは、もともと農村地域から先に普及してきた経緯がある。それは、テニスコートより若干広い程度であるゲートボールのコートが、農村地域にあっては比較的得られやすかったことも大きな背景であったと考えられる。

(5) 出場した大会の規模

調査対象者のうち、男子2人、女子4人を除く他のすべての者はゲートボール大会への出場経験があり、この点についての地域差はなかった。そこで次に、出場した大会の規模についてみてみよう。男子の「九州大会」出場者は、都市部31.3、農村部6.2%、「県大会」は都市部21.1%、農村部23.6%、「市町村大会」は都市部30.5%、農村部50.0%、「校区や町内の大会」は都市部14.1%、農村部12.4%となっている。都市部は半数以上が県大会以上の規模の大会に出場しているが、農村部ではこの点3割弱である。つまり、都市部の実施者の方が規模の大きい大会に出場した経験のある者が多い ($P < .01$)。女子は、男子とだいたい同じ傾向を示しているが、地域差はみられなかった。

(6) 審判員の資格

男子でゲートボールの審判員の資格を持っている者は、都市部66.9%、農村部55.7%であった。都市部の方に有資格者が多い ($P < .05$)。女子は、都市部で44.6%、農村部で18.0%であり、やはり都市部に有資格者が多い ($P < .01$)。

(7) ルールの全国統一について

ゲートボールのルールが激論の末一応統一されたのは、昭和60年2月のことである。本稿の調査はそれ以前に行われたものであるが、ルールの統一についての考え方は女子の場合において5%水準の地域差がみられた。すなわち、「全国統一ルールにすべきである」という者は、都市部61.5%、農村部73.0%であり、農村部にこの考えの持主が多いということである。男子は有意差はなかったが、都市部85.0%、農村部90.6%がこの考えを持っており、大部分の者がルールの統一を望んでいた状況がうかがえる。

(8) 団体・組織のあり方について

ゲートボールの団体・組織のあり方としては、男子は「全国組織として1つにまとまった方がよい」と考える者が、都市部(65.6%)より農村部(79.6%)の方に多くみられた ($P < .05$)。女子は両地域とも約4割の者がこの考え方を支持しているが、そこに有意な差

表9 大会のあり方について (%)

		N	全国大会があった方がよい	九州大会でよい	県大会くらいでよい	市町村大会くらいでよい	対抗・親善試合程度
男子	都市	113	38.1	14.2	17.7	16.8	13.3
	農村	172	53.5	12.2	9.9	8.7	15.7
女子	都市	80	13.8	13.8	16.3	16.3	40.0
	農村	90	26.7	2.2	21.1	30.0	20.0

男子 $p < .01$, 女子 $p < .01$

はなかった。なお、従来乱立してきたゲートボールの団体・組織は、昭和59年12月に日本ゲートボール連合の名称で統一されている。

(9) 大会のあり方

この点についての意見は全体的にさまざまであるが、「全国大会があった方がよい」とする者は、男女とも農村部に多い(表9)。市町村大会以下でみると、いわゆる小規模大会でよいとする者は都市部の方が多い。つまり、農村部の実施者の方が男女ともより大きな大会を志向しているといえよう(男子 $P < .01$, 女子 $P < .01$)。この傾向は、先にみたルール統一の意見の傾向とも相応するものと思われる。

以上述べてきた項目は、ゲートボールの実施程度を除くと少なくとも男女のいずれかにおいて地域差がみられたものである。反面、「ゲートボールを開始したきっかけ」、「クラブ所属の有無」、「大会への出場経験」、「大会への選手としての出場程度」、「クラブの監督の経験」、「ルールの違いによる困惑」、「ゲートボールの継続要因」、「所属クラブのタイプ」の8項目に関しては、地域間に有意差は認められなかった。

(10) 実施上の問題

ゲートボールを実施していく上での問題に関しては(表6)、「練習に対する不平・不満」、「試合での審判に対する不平・不満」、「クラブやチームのリーダー(指導者や監督など)に対する不平・不満」、「練習中や対人関係でのいやな思い」、「試合のための選手選考でのいやな思い」の5項目については、男女ともこれといった違いはみられなかった。唯一女子において、「今までにゲートボールをやめたいと思った」という項目のみ都市部に多くみられた($P < .05$)。練習や審判員、リーダーに対する不平や不満は、一部にはみられるものの全体としては少ない。また対人関係その他についても、問題はそれほど深刻というほどではない。

以上、ゲートボールの活動状況と実施上の問題について調査の結果をみてきた。都市と農村を比較することでいくつかの特徴が明らかになったが、なかでもゲートボールの実施場所、実施時間、実施者の経験年数などはクラマー係数も高く、それぞれの地域のゲートボールの特徴をよく現わしている。

4. ゲートボール意識

(1) 行動意図・規範信念

表10は、両地域においてゲートボールの行動意図と規範信念に関して、実施者而非実施者の比較検定の結果を示すものである。行動意図とはその行動をしようとする意図であり、規範信念とは周囲の他者の期待に対する信念である。表中に明らかなように、すべての項目で顕著な差があり、クラマー係数も極めて高い。すなわち、性別、地域別を問わずゲートボール実施者は非実施者に比べると、ゲートボールに対する行動意図や家族の期待に対する信念(家族の者が本人にゲートボールをすべきであると期待しているかについての信念)及び友人の期待に対する信念がいずれも極めて高いということである。これは、当然予想された結果であった。そこで次に、実施者について都市部と農村部の比較を行ったが、男女ともいずれの項目に関しても有意差はみられなかった。両地域の実施者は、ゲートボールに対する行動意図も家族や友人の期待に対する信念も高い者が大部分であり、ゲートボールという行動が生じるための心理的要因が形成されているといつてよい。

(2) ゲートボールの効果に対する信念

ゲートボールの効果を心理的、社会的及び身体的なもの3つに分け、各々5項目の計15項目に対する信念を調査した。まず両地域とも非実施者と比較する

表10 ゲートボールに関する行動意図・規範信念についての実施者・非実施者の比較

項目	性別		男		子		女		子	
	地域		都市		農村		都市		農村	
	検定	係数	χ^2 検定	クラマー係数	χ^2 検定	クラマー係数	χ^2 検定	クラマー係数	χ^2 検定	クラマー係数
1. ゲートボール行動意図	**	.810	**	.684	**	.729	**	.697	**	.445
2. 家族の期待に対する信念	**	.701	**	.513	**	.602	**	.447	**	.447
3. 友人の期待に対する信念	**	.596	**	.449	**	.575	**	.447	**	.447

** $P < .01$

表11 ゲートボールの効果に対する信念についての実施者・非実施者の比較

項目		性別		男 子		女 子			
		地域		都 市		農 村			
		検定	係数	χ^2 検定	クラマー係数	χ^2 検定	クラマー係数		
心理的効果	1 忍耐力の強い性格になる	$\Delta\Delta$.192	**	.259	Δ	.231	**	.334
	2 競争の楽しさを味わう	*	.220	**	.272	*	.268	Δ	.203
	3 特技を養い、役に立つ	—	.150	*	.215	—	.149	*	.278
	4 自分の可能性をためせる	$\Delta\Delta$.205	*	.202	—	.118	—	.164
	5 自分の能力を認めてもらえる	**	.305	—	.050	—	.110	*	.268
社会的効果	6 協力的な性格になる	**	.252	**	.257	—	.171	*	.272
	7 グループの連帯感が増す	**	.376	**	.243	—	.136	*	.255
	8 エチケット・マナーがよくなる	—	.182	*	.221	—	.205	Δ	.206
	9 生活がいきいき、充実する	**	.271	**	.282	—	.252	**	.454
	10 明るい性格になる	**	.321	**	.244	*	.310	**	.371
身体的効果	11 胃や腸の調子がよくなる	**	.252	**	.226	—	.092	**	.509
	12 ぐっすり眠るのに役立つ	*	.228	$\Delta\Delta$.193	$\Delta\Delta$.272	**	.464
	13 すばやい動きができるようになる	**	.299	**	.230	—	.197	**	.371
	14 からだのよぶんな脂肪がとれる	Δ	.174	$\Delta\Delta$.185	*	.323	*	.304
	15 ふとりすぎの予防になる	*	.242	—	.126	—	.183	*	.304

** P<.01, * P<.05, $\Delta\Delta$ P<.10, Δ P<.20

表12 ゲートボールの効果に対する信念の地域差

項目		性別		男 子		女 子	
		検定	係数	χ^2 検定	クラマー係数	χ^2 検定	クラマー係数
心理的効果	1 忍耐力の強い性格になる	*	.176	—	.148	—	.148
	2 競争の楽しさを味わう	—	.080	—	.072	—	.072
	3 特技を養い、役に立つ	Δ	.141	—	.047	—	.047
	4 自分の可能性をためせる	—	.092	—	.130	—	.130
	5 自分の能力を認めてもらえる	—	.026	—	.188	—	.188
社会的効果	6 協力的な性格になる	—	.092	*	.228	—	.228
	7 グループの連帯感が増す	Δ	.131	—	.129	—	.129
	8 エチケット・マナーがよくなる	—	.045	—	.088	—	.088
	9 生活がいきいき、充実する	—	.063	—	.169	—	.169
	10 明るい性格になる	—	.085	—	.155	—	.155
身体的効果	11 胃や腸の調子がよくなる	**	.209	—	.066	—	.066
	12 ぐっすり眠るのに役立つ	*	.187	—	.142	—	.142
	13 すばやい動きができるようになる	—	.056	—	.157	—	.157
	14 からだのよぶんな脂肪がとれる	Δ	.128	—	.101	—	.101
	15 ふとりすぎの予防になる	—	.026	—	.144	—	.144

** P<.01, * P<.05, Δ P<.20

と(表11), 男子は都市部で10項目, 農村部で11項目, 女子は都市部で3項目, 農村部で12項目に1~5%水準の有意差がみられた。女子の都市部で非実施者とそれほど大きな差はなかったものの, 全体として実施者はゲートボールの効果について高い信念を持っていることが理解された。表12はこれを地域別に比較したものであるが, 男女とも有意差のある項目は少ない。15項目中, 男子では心理的效果の「忍耐力の強い性格になる」, 身体的效果の「胃や腸の調子がよくなる」と「ぐっすり眠るのに役立つ」の計3項目, 女子は社会的效果の「協力的な性格になる」の1項目に差が認められただけであった。ゲートボールの効果に対する信念の地域差はあまりないとみてよい。

(3) ゲートボールに対する態度

ゲートボールに対する態度を構成するものとして, ここでは不安感情4, 快感情4の計8項目を設定した。表13は, 両地域の実施者と非実施者を比較した結果であるが, 女子の都市部でそれほど大きな差はないものの男子や特に女子の農村部ではかなりの差がみられる。いずれも実施者の方が好意的な態度を示しており, 不安感情が少なく快感情を高く評価している。次に実施者の地域別比較をみると(表14), 男子はゲートボールをすることに対しての不安感情の「みじめなことにあいそう」($P < .05$)と快感情の「楽しいことがあるにちがいない」($P < .05$)の2項目, 同じく女子は快感情の「楽しいことがあるにちがいない」($P < .01$)と「こころよい気持ちになるだろう」($P < .05$)

表13 ゲートボールに対する態度についての実施者・非実施者の比較

項目	性別 地域	男 子				女 子			
		都 市		農 村		都 市		農 村	
		χ^2 検定	クラマー 係 数	χ^2 検定	クラマー 係 数	χ^2 検定	クラマー 係 数	χ^2 検定	クラマー 係 数
不安感情	1 なんとなく心配でいられない	$\Delta\Delta$.204	—	.132	—	.167	**	.370
	2 みじめなことにあいそう	**	.297	$\Delta\Delta$.190	$\Delta\Delta$.262	**	.467
	3 はずかしいめにあいそう	**	.285	*	.211	Δ	.244	**	.507
	4 こわいめにあいそう	—	.169	*	.209	*	.284	**	.391
快感情	5 充実感が残るだろう	**	.301	—	.087	—	.023	$\Delta\Delta$.234
	6 楽しいことがあるにちがいない	*	.212	*	.216	—	.188	**	.464
	7 考えるだけでうきうき	**	.309	**	.307	*	.291	**	.496
	8 こころよい気持ちになるだろう	**	.280	*	.226	—	.199	**	.597

** $P < .01$, * $P < .05$, $\Delta\Delta P < .10$, $\Delta P < .20$

表14 ゲートボールに対する態度についての地域差

項目	性別 地域	男 子		女 子	
		χ^2 検定	クラマー 係 数	χ^2 検定	クラマー 係 数
不安感情	1 なんとなく心配でいられない	—	.043	—	.094
	2 みじめなことにあいそう	*	.169	$\Delta\Delta$.197
	3 はずかしいめにあいそう	—	.094	Δ	.178
	4 こわいめにあいそう	—	.112	—	.121
快感情	5 充実感が残るだろう	Δ	.149	—	.150
	6 楽しいことがあるにちがいない	*	.174	**	.341
	7 考えるだけでうきうき	—	.099	$\Delta\Delta$.191
	8 こころよい気持ちになるだろう	Δ	.142	*	.231

** $P < .01$, * $P < .05$, $\Delta\Delta P < .10$, $\Delta P < .20$

の2項目のみに有意差がみられた。つまり、ゲートボールをすることに対して「みじめなことにあいそう」という者が男子の都市部に少ないこと、「楽しいことがあるにちがいない」という者が男女とも農村部に多いこと、及び「こころよい気持ちになるだろう」という者が女子の農村部に多いということである。しかしながら、ゲートボールに対する態度は両地域とも非常に好意的であり、全体的に大きな違いはないといっ

5. ゲートボールの評価

ゲートボールを実施するようになってから、どのような効果または変化があったかについて、心理面、社会面、身体面、生活面、家庭面の5つの側面に分けて自己評価して貰った。表15はその結果である。男子は22項目中8項目、女子は4項目に1～5%水準の有

意差がみられた。まず男子の場合をみると、都市部より農村部にその傾向が大きいのは「ゲートボールのことで小言ばかりいうようになった」、「失敗が多く劣等感が増した」、「試合での口げんかやトラブルが多くなった」、「夢中になりすぎ仕事をしなくなった」という項目であり、心理面、社会面、家庭面でのマイナスの評価が多くなっている。他方都市部の実施者に多いのは、「足腰が強くなり動きが活発になった」、「食事に注意するようになった」、「睡眠に注意し生活が規則正しくなった」という身体面、生活面での効果に関する項目であった。

次に女子についてみると、農村部の実施者の間でその傾向が認められるのは、社会面の「試合などで口げんかやトラブルが多くなった」と生活面の「時間を有効に過ごすようになった」の2項目であり、都市部の実施者に多いのは身体面の「足腰が強くなり動きが活

表15 ゲートボールの評価についての地域差（自己評価）

項目	検定・係数	性別			
		男子	女子		
		χ^2 検定	クラマー係数	χ^2 検定	クラマー係数
心理面	1. ゲートボールのことで小言ばかりいうようになった	**	.190	—	.084
	2. 劣等感の増加	**	.225	△	.159
	3. 競争のおもしろさを味わう	—	.062	—	.106
	4. 生きがいになり、毎日が楽しい	—	.079	—	.047
	5. 作戦が必要、頭を使うようになった	—	.036	—	.037
社会面	6. 友達・仲間の増加	*	.176	△△	.179
	7. 他人を理解でき、協調的になった	△	.113	—	.118
	8. 口げんかやトラブルが多くなった	*	.182	**	.242
	9. 勝負にこだわり、練習がきびしくなった	△	.124	—	.041
	10. 試合に出るため、地域への愛着がました	—	.053	—	.046
身体面	11. 体調がよくなり、元気になった	—	.071	—	.029
	12. 夢中になりすぎ、からだをこわした	—	.061	—	.068
	13. 疲れすぎるようになった	△△	.145	—	.105
	14. 足腰が強くなり動きが活発化	*	.162	**	.263
生活面	15. 酒・タバコが減った	—	.111	—	.078
	16. 食事に注意するようになった	*	.151	**	.270
	17. 睡眠に注意し、生活が規則的	**	.255	△△	.173
	18. 時間を有効に過ごすようになった	△△	.130	*	.220
家庭面	19. 家庭の雰囲気が明るくなった	—	.017	—	.036
	20. 家族との対話が多くなった	—	.071	—	.035
	21. 経済的負担が多くなった	—	.012	—	.122
	22. 夢中になりすぎ、仕事をしなくなった	**	.203	—	.125

**P<.01, *P<.05, △△P<.10, △P<.20

発になった」と生活面の「食事に注意するようになった」の2項目であった。都市部は、男子同様プラス面の評価をしている。農村部は、プラス面の評価もあればマイナス面の評価もある。

一応22項目すべてについて、ゲートボール実施による効果は程度の差こそあれ性別、地域別を問わず現われているが、以上からわかるように農村部ではゲートボール実施者によるマイナス面あるいは試合をめぐるトラブルなどが都市部より多い傾向にある。その点都市部の方は、身体面、社会面で効果が相対的に多くみられる。ゲートボールは、生活の中で良い評価が得られてこそこれを実施の意味がある。特に農村部にあっては、明らかになった弊害を少なくしていく方向で、実施者に対するマナーやエチケット、生活におけるスポーツ（ゲートボール）の意義と楽しみ方、試合

における望ましい態度などについての指導・教育が大切であろう。

要 約

社会心理学立場から、都市と農村におけるゲートボール実施者の特性、生活状況、スポーツ活動と意識、ゲートボールの実態と問題、ゲートボールの意識と評価などについて、地域差に焦点を当てて比較分析してきた。研究結果の要約をすると、以下のようになる。

1. ゲートボール実施者の特性と生活状況に関しては、男女とも最終学歴、居住年数、働き盛りの頃の居住地と職場、長く従事した職業、働き盛りの頃の余暇観、現在の生活方法、近所づきあい、各種趣味活動において、都市と農村の間では有意差がみられた。しかし、生活意識については地域差はみられなかった。

表16 都市と農村のゲートボール実施者の比較（クramer係数.30以上）

項目	性別	男 子		女 子	
	地域	都 市	農 村	都 市	農 村
基本的特性	1 最終学歴	高い	低い	高い	低い
	2 居住年数	短い	長い	短い	長い
	3 働き盛りの居住地と職場	別の場所	同じ場所	別の場所	同じ場所
	4 長く従事した職業	事務職、 商・自営業	農林漁業	その他、 商・自営業	農林漁業
	5 働き盛りの頃の余暇観	仕事重視*	余暇重視*	仕事重視	余暇重視
	6 現在の生活方法	恩給・退職金	定職あり	恩給・退職金	家族に頼る、 定職あり
生行活動	7 近所づきあい	挨拶程度	親密	挨拶程度	親密
趣味活動	8 囲碁・将棋など	多い	少ない	多い	少ない
	9 盆栽・庭いじり	多い	少ない	多い	少ない
	10 音楽・民謡など	—	—	多い	少ない
	11 書・華・茶道、絵画	多い	少ない	多い	少ない
ゲートボール活動	12 経験年数	短い	長い	短い	長い
	13 実施場所	公園	あき地、その他	公園	あき地、その他
	14 出場した大会の規模	県大会以上	市町村大会	—	—
	15 大会のあり方	小規模*	大規模*	小規模	大規模

(注) *印はクramer係数.30以下であるが χ^2 検定では1%水準で有意。

2. スポーツ活動と意識に関しては、都市部の方にゲートボール以外のスポーツを実施する者が男女とも多い傾向にある。しかしながら、過去のスポーツ経験やスポーツ意識については、これといった地域差はみられなかった。

3. ゲートボール活動をめぐっては、1日平均の実施時間、経験年数、実施場所、審判員資格、大会のあり方については、男女とも有意な地域差がみられた。また、出場した大会の規模、団体・組織のあり方は男子において、ルールの全国統一についての考え方は女子においてそれぞれ地域差が認められた。しかし、ゲートボールの実施程度は都市部も農村部も高く、そこに有意な差はみられなかった。

4. ゲートボール実施上の問題に関しては、両地域間に大きな違いはなく、練習や審判員、リーダーなどに対する不平や不満は一部の実施者の間にみられるものの、全体として問題はそれほど深刻化してはいない。

5. ゲートボール意識に関しては、両地域ともゲートボールに関する行動意図や家族及び友人の期待に対する信念、ゲートボールの効果に対する信念は高く、またゲートボールに対する態度も好意的であり、これといった地域差はみられなかった。

6. ゲートボール実施による効果や変化についての評価は、両地域ともある程度得られている。しかしながら、都市部では身体面、社会面でのプラスの評価が多いのに対し、農村部ではゲートボール実施による弊害あるいは試合をめぐるとらブルがあるなどマイナスの評価が相対的に多い傾向にある。

以上のとおりであるが、表16は都市部と農村部の地域差が顕著であった項目(クラマー係数.30以上)について、その内容を示したものである。特定の項目を除けば、男女ともほぼ同様の傾向を示していることがわかる。今回の調査研究では、都市部については

ゲートボールのあり方に関して大きな問題はないようであるが、農村部についてはいくつかの弊害が実施者自身の評価を通して明らかになった。今後は、こうした弊害をなくす方向での実施者の指導・教育が重要と思われる。

(本研究の要旨は、第35回九州体育学会で発表した。)

文 献

- 1) 藤田純男, 芹沢幹雄: 焼津市における老人ゲートボールに関する考察, 静岡女子大学研究紀要, 12: 109—110, 1978。
- 2) 岩崎健一, 庭木守彦, 古閑広登, 井上勝子: ゲートボール愛好者の実態に関する研究, 熊本大学教養部紀要, 自然科学編, 14: P. 48, 1979。
- 3) 金崎良三, 徳永幹雄: 高齢者のスポーツに関する社会心理学的研究—ゲートボールの実態と効果について—, レクリエーション研究, 9: 4—12, 1982。
- 4) 金崎良三: 高齢化社会とスポーツ, 『健康とスポーツの構図』所収, ぎょうせい, 1984, PP. 180—181。
- 5) 金崎良三, 徳永幹雄, 多々納秀雄: 高齢者のスポーツに関する社会心理学的研究(3)—ゲートボール実施をめぐると問題について—, 健康科学, 9: 205—215, 1987。
- 6) 玉田良雄: 国民の健康・体力に対する意識と運動・スポーツ実施状況等, 指導者のためのスポーツジャーナル, 59: P. 4, 1983。
- 7) 徳永幹雄, 金崎良三: ゲートボールに関する調査報告書, 九州大学健康科学センター, 1981, PP. 32—33。
- 8) 徳永幹雄, 金崎良三: 前掲, PP. 14—15。